

まえがき

本報告書は、2015年度教育学実習「統計的調査実習」(第1学期)で実施した「若年者のライフスタイルと意識に関する調査」の結果を取りまとめたものである。本報告書には、調査設計と回収状況に関する基本的事項を整理したレポートに続き、受講生による研究成果を報告したレポートが所収されている。

これまで5年間にわたり、この実習にかかわる調査と報告については、山形大学地域文化教育学部「社会調査演習」(担当：山本英弘准教授)と連携しておこなってきた。それから、本年度についても、郵送法による実査のための調査協力者リクルーティングにかんして、楽天リサーチ株式会社に委託した。調査実施にかかわるさまざまな困難に直面したときに、こうした連携や、委託によって解決される点が多々あることを、本年度も再確認した次第である。関係諸機関の皆様へと、この場を借りて御礼申し上げたい。

本年度の調査実習も、TAによる大いなる貢献が支えとなった。そのように語れば聞こえはよいが、要するに、彼女/彼らにとって負担が甚大であったという感も否めない。感謝と同時に申し訳なく思う気持ちにもなる。ただし、このTA経験は、教育経験として非常に価値あるものであると信じてもいる。遠き未来に、TA諸君のなかから、ここでの経験を糧として、よき教育者となってくれる者が1人でも出てくれたらと願ってやまない。ボランティアでTAのまとめ役を快諾してくれた苫米地なつ帆さん(博士後期課程3年)、池田岳大さん(博士前期課程2年)、工藤沙季さん(博士前期課程2年)、下瀬川陽さん(博士前期課程2年)に、感謝申し上げたい。

受講してくれた学部生・院生の諸君には、幾多の課題を提出し、班で分かれて議論し、皆の前で報告し、と矢継ぎ早に展開されるこの調査実習を、よくぞ立派にやり遂げたと素直に賞賛したい。例年に比して受講生人数が少なく、その分、1人1人にかかる負荷は重くなりがちであったように思う。調査実習を通して、「トンペイ」生の底力を改めて見せてもらったという思いになった。

少々センチメンタリズムを隠せなくなっているのは、この調査実習が、本年度をもって終焉を迎えるからであろう。授業自体がなくなるわけではもちろんないが、これまで調査実習を主に担当してきた筆者自身が、他大学への転出することが目前となった。蓄積してきたさまざまな教育にかんするアイデアを、遠慮なく徹底的に調査実習において具現化することができ、個人的には本当に楽しめた授業であった。さまざまな試みを温かく見守ってくださった、秋永雄一教授に、心からの感謝を申し上げたい次第である。

東北大学教育学部の教育学実習は、担当者が代わり、装い新たに、これからも発展していくことと思う。今後とも、皆様からのご指導ご支援を賜るようお願いしたい。

2015年9月  
三輪 哲